

二絃琴：文苑

著者	紫村
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 9
ページ	5 2 - 5 4
発行年	1903-05-25
その他の言語のタイトル	二弦琴：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5541

二絃琴

哀愁曲

紫

村

今行樂の歌はなし

五十二

春の光に一時の

爛熳花は野に満てど

人は知らずや高樓に

恨ぞ多き曲あるを

一曲絶えず誰が爲に

愁眉の雲を見るものぞ

竊たる姿若かるに

弾くやうつゝの調べの緒

眸こむる露をだに

夕の星と輝くよ

御輦静かに渡り行く

天上月のけはひぞも

雨となり又雲となる

梵の故事はしらねども

三春夢は醒め易く

あゝ縹緲の跡何處

神秘の影は深くして

思ひを籠むるそが中に

哀愁の色、歡樂の香

悠たる水に言寄せて

長き想を盡さんか

情綿々の果てしなく

榮華の光今も見

紅の袂を翻へし

うかれし春のいと淡き

戀の甘酒永劫の

泪に交る味は變りぬ

夕の叫び

春をのせ來る習々の

風に微韻の香をこめて

さすらふ一人何となく
江水の邊笛吹きぬ

江頭立ちて眺むれば
水遙々と霞みつゝ
深き思ひを沈めたる
蒼穹靜かに映じたり

落つる日影は華やかに
五彩の文を織りなせど
光芒稍にをさまれば
夕の叫び天地に充つ

夫れ法ありて人の子が
墳墓を藏す祖國の土
道正しきを踏み行かば
蓮華花咲く惠の地

刑餘の徒誰か白日の
握手を屑しとする

しかも悔悟の泪あり
泪を赦さざる人ありや

天に對する泪なり
神に對する涙なり
無限の恩威ここに在り
無限の感泣ここに在り

眞實マコトを示すが胸に
潜みし影は果たありや
ろは天の赦しましぬるぞ
ろは神の赦しましぬるぞ

妄りに云ふを人止めよ
奇しき力を仰ぎ見て
渴仰隨喜の念ひなき
爾れ果た何の人なりや

佛陀の教千載の
契を托す廣大の

慈愛の泉涸れずして
衆生四方に服したり

南方椰子の蔭にして

橄欖の香類ひなく

其所に聚る民衆の

信仰天に在るを見よ

何れか重しとなす所

五十四

靈妙の水を地に汲みて
靈妙の息を天に捧げ
不變の心服従の志

かくて歌はん永久に
神と人との結ばりを
かくて唱へん限りなく
人と人との結ばりを

短 詩

○

雨の子

我をかなたに包みねはせて天地にわび入らしむる雨の花園
苑のもゝ今年まれなる競ひ咲き咲きぬ草舎の花くもるまで
もゝの春たけなはにして雛節句麗はし國のならはしのはな
人によるも草木によるも寂び心花にゆづらば花くち折れん

○

虹の子

耳はあれど聞きぬ樂の-high譜をはしめて誰か世を亂しけむ